

神の狂気を求めて(十)

——ヒエロニムス・ボッスの旅——

掛下 栄一郎

画家の出身地フランドルには、合計八点の真筆とされる作品が残されているが、ブリュッセル、ガン、ブルージュと、ベルギーの三つの美術館を歴訪した私たちは、そのうちの四点と対面したことになり、残りの四点は、すべてオランダのロッテルダム・ボイマンス美術館に収蔵されているので、今回のボッス行脚の本来の目的からすれば、ブルージュからはガン、アントワープを経て、そのままロッテルダムに直行すればよいのだが、途中のアントワープ王立美術館は、とてもそのまま通過するにしのびない、ベルギーきつてのすばらしい美術館である。とりわけ、中世からルネッサンス期にかけての、フランドルの巨匠たちの名画の数々は、他に比肩するものがない豊富さを誇っている。そういうわけで、ロッテルダムでのボッスとの再会にはやる心を抑えて、約二時間を、この王立美術館訪問に割くことに決めたのである。

この美術館、名前は王立(Royal)となっているが、中世以来の商業都市の美術館らしく、すでに十四世紀に、聖ルカ画家組合によるコレクションに、その始まりを見ることが出来る。その後、教会の寄贈によるファン・アイクやルーベンスの作品、十九世紀に市長をつとめたヴァン・エルトボルンの収集品などが加わって、現在の豊富なコレクション

ヨ
ンが完成されたのである。

久しぶりに訪れたこの美術館での限られた時間の中で、私が最もその再会を望んだのは、十五世紀のフランドルの巨匠たちの名作の数々であることはもちろんであるが、それ以外に一点、かつてこの美術館で、終生忘れることのできない強烈な印象を刻印された、ヤン（ジャン）・フーケの『聖母子』とのそれであった。

十五世紀初期ルネッサンス期のフランスの画家として、きわめてユニークな存在であったフーケの作品は少い。著



ジャン・フーケ『聖母子』

名のあるのは、ルーヴル所蔵の『自画像』のみとされているが、このアントワープの『聖母子』は、ルーヴルの『自画像』や『シャルル七世肖像』などと並んで、彼の最高傑作と評価されているものである。

いずれも、近代絵画への先駆としての、その鋭い内面心理の表出に特色を持っているが、とりわけ、この『聖母子』では、写実を基調として、当時としては、ほとんど他に例を見ないほど大胆な、抽象化やデフォルマシオンが断行されており、また色彩の上でも、赤と青の原色のコントラストを、奔放に際立たせており、大きく時代を超えた、はるかな近代

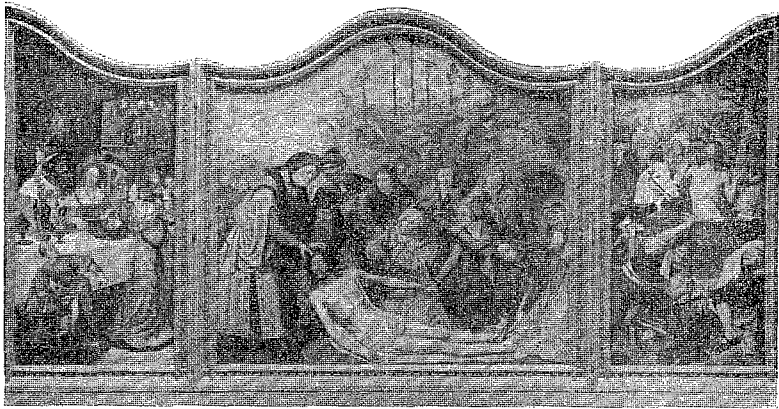


ヴァン・デル・ウエイデン『七つの秘跡』

芸術の美の世界を鋭く予示しているのである。これもまた、「神の狂気」の靈感に触発された、たぐい稀な名画といわざるをえないであろう。

もちろん、この美術館本来のコレクションを代表する名品といえ、十五世紀フランドル絵画選抜きの名作群であろう。ヴァン・デル・ウエイデンの『七つの秘跡』、メームリンクの『奏楽の天使たちを従えるキリスト』、それに、マサイスの『キリストの埋葬』の三つの三連祭壇画が、まずあげられるであろうが、いずれも、それぞれの画家の代表的傑作と呼ぶにふさわしいものである。

ウエイデンの作品については、私たちはすでに、ボースの『最後の審判』をはじめ、いくつかの名作に触れてきたが、『七つの秘跡』もまた、彼の天才的靈感の産物といえよう。厳肅な聖堂の中に立てられた、磔刑のイエスの十字架という、意表をつく発想に、まず私たちは深い衝撃を受ける。私たちはこ

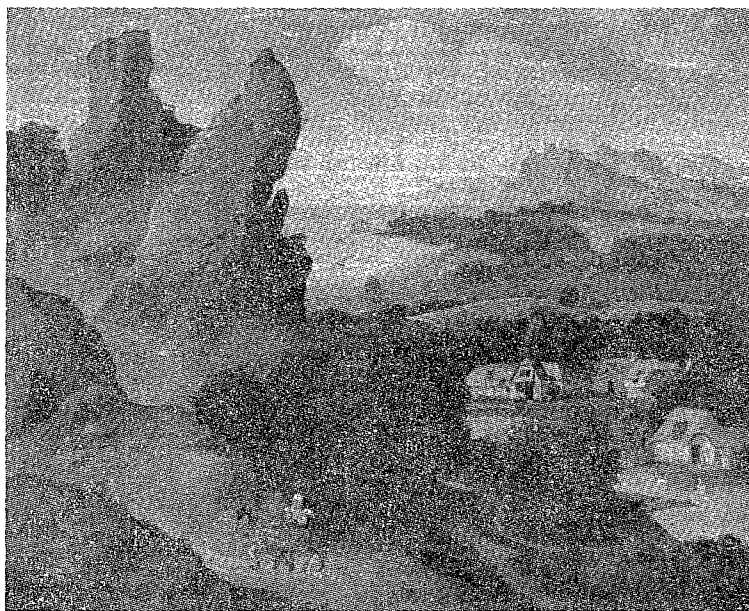


クエンティン・マサイス『キリストの埋葬』

ここに、ファン・アイクを想わせる厳正細密な表現技法と、ウェイデン特有の鮮麗な色彩感覚とが、深い内的心理の描写と、暖い人間性の表出にみごとに結集した、稀有の絵画芸術の完成の姿を見ることができるのである。これまた、「神の狂気」からの靈感の触発による、偉大な芸術作品の一つといえるであろう。

ヴァン・デル・ウェイデンから多くを学んだクエンティン・マサイスの作品もまた、この美術館の誇るコレクションの一つである。ルーヴァン生れの彼は、ファン・アイク、ウェイデンの流れを汲むフランドルの細密描写と、鮮やかな色彩感覚に加えて、イタリア絵画、とりわけ、レオナルドの技法から大きな影響を受け、これを自家薬籠中のものとして、静謐な色彩の中に、いっそう近代的な、人間心理の深層の表出に成功しているのである。

ここであと一点、見逃しえない名画について述べておこう。ヨアキム・パティニールの『エジプトへの途上の聖家族』がそれである。パティニールについては、すでに、ブラド美術館の『アケロンの渡し舟』のところでも述べたように、「神の狂気」の芸術家としては、ボッスときわめて近い類縁関係にある画家といえよう。デューラーが、「当代随一の



ヨアキム・パティニール『エジプトへの途上の聖家族』

風景画家」と激賞したように、彼は、画家としてのエネルギーを、ことごとく風景に注入したかのごとくである。底知れぬエネルギーを吸収した深い淵、限りない生命力を蓄えこんで、今にも動き出しそうな岩山の描写は、まさしく彼の独壇場である。

そういえば、風景に強烈な生命を注入した、「神の狂気」の画家の一人として、ウィーン美術学校ギャラリー所蔵の、『十字架を担うキリストと風景』を描いた、ヘンドリック・メト・デ・ブレスについては、すでに述べたところであるが、彼はパティニールの甥といわれており、プラド美術館所蔵の、いま一点のパティニールの作品、『聖アントニウスの誘惑』の、人物の部分を描いたとされている、マサイスもまた、パティニールと親戚の関係にあった。アントワープのパティニールのこの絵は、この画家が最も多く描いたと思われる主題によるもので、その点からの興味はほとんどないが、この絵が私た

ちを惹きつけるのは、画家が自然描写の中に注入した、その強烈なエネルギーの放射である。画面の左半分の岩山から発散するエネルギーが、この絵に不思議な活力を付与しているが、私たちはそこに、「神の狂気」に触発された、この画家特有の靈感を感じないではいられないのである。

王立美術館での、あわただしく限られた、しかしきわめて充実した、二時間の貴重な美的体験を反芻しながら、大急ぎで中央駅までタクシーで引かえし、ボッスとの最後のランデヴーに心を踊らせながら、ロッテルダムまでの約一時間の列車の人となった。

オランダの誇るロッテルダム・ボイマンズ美術館は、一八四七年、オットー・ボイマンズなる人物が、みずからのコレクションを、ロッテルダム市に遺贈したことがその端緒となり、その後の市当局による、地道な収集・整備の努力が実を結び、一九三五年に建てられた新しい建物とともに、今日のボイマンズ美術館が誕生したのである。

その後建物の増改築に加え、収蔵品も増加し、美術館としての内容もいっそう多彩となり、今日のような、「古典美術」、「現代美術」、「版画とデッサン」、「装飾美術とデザイン」の四大部門に遡大なコレクションを持つ、オランダを代表する一大総合美術館に発展したのである。

活気溢れる商業都市ロッテルダムの中央駅からは、歩いてもそれほど距離ではないし、また何番かの電車に乗れば十分とはかからないことは分かっていたものの、やはりボッスとのランデヴーに心はやっていた私は、荷物を預けるのもそこそこにタクシーに乗った。

以前来たときとは見違えるほど、近代的建物の増築された美術館のたたずまいに、いささか戸惑いながら、そして、

閉館するまでまだかなり時間はあるものの、今日これからの時間だけでは、とうていこの美術館の全貌に接するのは不可能であることを考えて、閉館までの二時間半は、もっぱら、古典美術のギャラリーで過すことに決心した。

そのうち、今日はアムステルダムまで行って泊り、明日は午前中、リークス美術館でレンブランドとヴェルメールをゆっくりと見たのち、ヴァン・ゴッホ美術館にも敬意を表して、昼過ぎの列車でデン・ハーグに立寄り、ここでも、ヴェルメールの名作たち、とりわけ『デルフトの風景』の神秘的な光を、心ゆくまで味わってから、パリ行の列車をつかまえるというのが、この二日間のあわただしい計画である。

さて、今回のボッサ行脚の旅を、このボイマンス美術館訪問で締めくくりにしたのは、ここにはボッサにかかわる作品が、真贋とりまぜて十点存在しており、数の上からは、プラド美術館に匹敵するものであるからである。

ところで、この十点の作品のうち、ほとんどの美術史家が、一致して真筆と認めているのは、『カナの結婚』、『聖クリストフォロス』、『放蕩息子の子帰宅』と、それに、保存状態は劣悪で、損傷も著しい『大洪水の祭壇画』二枚の四点であるが、それ以外に、ニューヨーク・メトロポリタン美術館所蔵の、『三博士礼拝』に酷似した作品、プリンストン大学美術館所蔵の、晩年の名作『ピラトの前のキリスト』を予示する、同じ主題による問題作、リスボンやブリュッセルの三連祭壇画『聖アントニウスの誘惑』の中央パネルの、きわめて忠実な模写と考えられるものに加え、小品ではあるものの、ボッサの特徴がかなりはっきりと見てとれる、『二人の司祭』と『女性の頭部』の二点が存在する。

これだけのボッサが一堂に並べられ、これにさらに、大ブリュエゲルの名作『バベルの塔』や、パティニールの佳作などが加わっている有様は、ボッサを中心として、「神の狂気」の芸術を追い求めている私たちにとっては、マド

リッドのプラド美術館以来の感動である。

まず、正面向って右端に『三博士礼拝』の絵がある。この主題によるボッサにかかわる作品は、かなり多く存在する。彼の最高傑作のひとつとして有名な、三連祭壇画のそれとは、すでにマドリッドで再会を済ませているが、同じような祭壇画としての作品は、あと数点存在する。しかし、それらはいずれも、かなり精巧な模写と考えられている。ロッテルダムのこの作品は、単独の板絵で、プラド美術館の中央パネルとは、かなり違った絵柄である。同じよ



伝ボッサ『三博士礼拝』

うな単独の板絵で、これとほとんど同じ内容を持ち、大きさが二倍以上のものが、ニューヨーク・メトロポリタン美術館に収蔵されているが、ちりばめられた各エピソードの寓意の深さ、登場人物の内面心理の描写の鋭さや、絵画全体としての迫力において、これらの二点は、とうていプラド美術館の作品に比すべくもない。

多くの美術史家は、この二点が、かなりの部分にボッサの筆が入っていると見ても、画家の青年期のものと考えており、ロッテルダム美術館当局も、ボッサ工房の作として扱っている。ただこの作品、保

そのすぐれた模写に接したばかりである。

ロッテルダムのこの絵は、最初から単独の板絵として作製されたものであろう。絵の内容は、リスボン、ブリュッセルの中央パネルとほとんど同様であるが、仔細を見ると、細部に若干の相違が見られ、全体の大きさも、前二作に比べるとかなり小さく、画家の署名も見られない。ブリュッセルのときにも触れておいたように、以前日本にも来たことのある、サン・パウロ美術館所蔵の同じ単独の板絵や、ブリュッセルの祭壇画に比しても、絵としての完成度は低く、リスボンの原作の持つ、圧倒的な迫力はとうてい望むべくもない。比較的良質の模写の域を出るものではない



伝ボッス『聖アントニウスの誘惑』

存状態も比較的良好で、魅惑的な色彩も充分に残されており、晩年の作品に特有の、寓意の蔽しさには欠けるものの、絵画としての美しさと、或る種の気品を備えた佳作であることは確かである。

さて、この作品の左隣には、ボッスおなじみの、『聖アントニウスの誘惑』がある。いうまでもなく、これのオリジナルは、リスボンの三連祭壇画中央パネルであるが、現在、これとほとんど同じ絵柄のボッス作と称するものが、三連祭壇画、あるいは単独の板絵として、各地の有名美術館に数多く収蔵されており、現に私たちも、昨日ブリュッセルで、

と思われる。

『聖アントニウスの誘惑』の隣に、まことにユニークなボッスの名作、『聖クリストフォロス』がある。この絵は、ロッテルダムの、ボッスにかかわる十点の作品中、最も大きいもので、一見して、画家の成熟度を感じさせる魅力的な作品である。保存状態も悪くなく、着衣の赤い色彩も、独特の美しさを保っている。ガンの『聖ヒエロニムス』や、マドリッド・ラザロ・ガルディアノ美術館の『聖ヨハネ』との類縁性を強く感じさせる。多くの美術史家も、これらの作品を、画家の芸術の完成期、一五〇四年前後の作と認めている。



ボッス『聖クリストフォロス』

この作品も、『聖ヨハネ』や『聖ヒエロニムス』と同じように、ボッスの作品の系列からすると、狂気の要素は、ほとんど絵の表に顕在することなく、表面は、静謐の正気理解によって貫かれているものの、画面全体に、独自の不思議な緊迫感がたよっているのは、画家の天才の発する狂気の炎が、むしろ、絵の内面で燃えたぎっており、それが、表面のおだやかさと、緊張をはらんだ均衡を保っているからである。

『聖ヨハネ』や『聖ヒエロニムス』ほど顕著ではないが、この絵でも、内面で燃焼する狂気の炎が、



ボッス『放蕩息子の帰宅』

絵画の随所に強烈な刺戟を刻印している。岸辺の樹木の枝に吊されたこわれた壺は、『逸楽の園』右パネルの樹木人間と無縁ではないし、背後のおだやかな風景の中にも、ボッス特有の、不吉さと悪をはらんだ記号がいくつも見出されるであろう。たとえば、遠景の建物から首を出している巨大な龍、逃げまどう人間、遠くの森で燃えさかる炎など、鋭い寓意が交錯しているのである。

『聖クリストフォロス』の隣に、小品とはいえ、ボッス芸術最高傑作の一つと評価されている名作、『放蕩息子の帰宅』が展示されている。私の場合も、この美術館を訪れた最大の目的は、この絵との再会にあった。正八角形の珍しい額に入ったこの絵は、直径七十一センチの円型に縁どられている。地味な作品ではあるが、絵画としては、完成された落着と、安定感を示しており、ほとんどの美術史家も、これを、画家の最晩年、一五一〇年頃の作品と考えている。

作品の系列からすると、狂気の要素のほとんど顕在しない、ボッスの作品としては、きわめて表面的理解の容易なものと考えられる一方、この絵には、おそらく誰も

が、一度見たら終生忘れることのない、不思議な、しかし強烈な内的感動を覚えることであろう。

この絵を、放蕩の限りを尽し、しかもなお何かにおびえながら、尾羽打枯して故郷に帰ろうとする、初老の道楽息子と考えれば、白鳥の看板のある売春宿、立小便の男、売春婦と交渉する刺客としての兵士、客を求めている女の前を、未練がましく足速に通り過ぎようとする男と、一応の、伝統的テーマによる解釈はつくであろう。

しかし、この絵の与える感銘は、もっと深いところにかかわっているようである。人間世界の悪と愚行に翻弄され、人生に疲れ果て、なお定見を持ちえない弱い人間の、迷妄の象徴的表現と見るべきではなからうか。私たちの心をつつのは、この主人公の、ひ弱い、臆病だが善良で鋭敏な、深い心理の動揺のみごとな描出である。十六世紀初頭に、これだけ鋭い、深層心理の絵画表現があったことに、何よりも私たちは驚嘆するのである。

プラド美術館の、『乾草車』の外翼に描かれている老人、あるいは、『逸楽の園』右パネルの樹木人間の顔に、この人物との深い類縁性を感じられなくもない。多くの美術史家が、これらの人物像に、画家自身の自画像を見ようとするのも、けだし当然のことであろう。

この絵は、人間の深層心理を描いた名作であることのほかに、他のボッスの作品に共通する、赤を基調とするあてやかな色彩とはうって変った、灰色と褐色を中心とする色調の無類の統合によって、新しい、落着いた、独自の美の領域を創造していることで、ボッスの全作品中でも、冠絶の名品と考えるべきではなからうか。リッツォーリー版『ヒエロニムス・ボッス』の著者チノッティも、「ホイエンやレンブラントを先取りしているだけでなく、ヴェルメールの明澄さを予告するもの」と絶讃しているが、至言であろう。



ボッス『カナの結婚』

この『放蕩息子の帰宅』の左隣に、ボッス初期の名作の一つ、『カナの結婚』がある。ほとんどの美術史家は、これをボッスの真筆と認め、現存する彼の作品の中では、最も初期に属するものの一つと見ている。保存状態はあまり良好ではなく、かなりの修復、切除が見られるものの、絵画全体としての色調は、むしろ多彩である。しかも、初期のボッスの作品の中では、最も豊富な想像力と寓意の描き込まれたものといえるであろう。

主題は、結婚式に招かれたキリストが、水を葡萄酒に変えたという、ヨハネ伝のエピソードによっているが、この絵が訴えているのは、そうしたキリストの奇蹟の礼讃ではない。仔細に見ると、この絵には、実にさまざまな寓意と謎が隠されている。中央ではなく、L字型の机の右側に坐ったキリストが、目の前で壺に注がれている水を、今まさに葡萄酒に変えようとしているのであるが、中央から左側には、むしろ、異教的、悪魔的エピソードの数々が描き込まれており、それが、右側のキリストの奇蹟との間に、激しい緊迫感を醸成しているのである。

キリストの向いでは、秘教の僧が、花嫁花婿に、杯をあげて黒ミサを行おうとしている。その後方で、口から炎を出す白鳥と、猪の首の料理を、盆にのせて運びこむ召使、さらにその後の方の段上で、

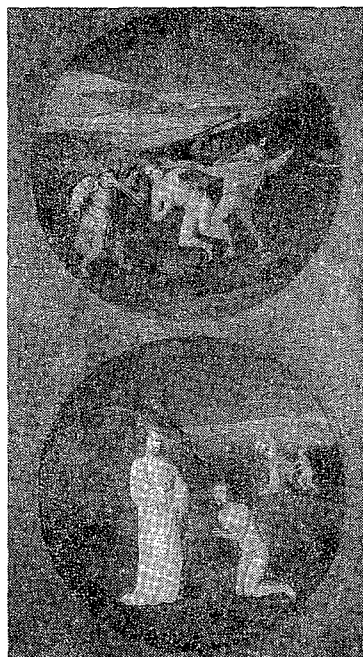
淫楽の象徴である風笛を吹く人物、その右手の祭壇には、キリスト教の聖具と並んで、異教の秘具が並べられており、その前で、手に杖を持った魔術師が秘儀を行っている。さらに、画面中央では、背中を向けた奇妙な小姓が、花嫁花婿に杯を捧げようとしているが、この謎めいた異教的雰囲気、強烈にこの絵の緊張を高めているようである。ちりばめられた数多くの謎は、考えれば考えるほど不可解であり、色彩の多彩さと、人物の多さにもかかわらず、この絵にただよっている雰囲気は、婚礼の華やかさというよりは、キリストと異教世界との間の、鏝ぜり合いによるすさまじい緊迫感と、それを見守るひとびとの不安感に発する不吉なそれである。

一見、狂気の表面的顕在性の少い、解釈の容易そうなこの絵にも、実は、画家の天才的想像力が、「神の狂気」の靈感を受けて生み出した、数多くのエピソードが入念に描きこまれており、それが、絵の表面の正統的信仰の世界と、内面において厳しく対立しており、そこから生ずる激しい緊迫感が、見るものを強く惹きつけるのであろう。ボッス初期の名品と賞讃されるのも当然である。

さて、ロッテルダムにはあと一つ、正確には、二点四面、ほとんどの美術史家によって、ボッスの真筆とされている作品がある。『大洪水の祭壇画』といわれているものがそれで、今日では、その中央パネルは失われており、左右両パネルと、それぞれの外翼画だけが残っている。中央パネルには、何が描かれていたか知る由もないが、多分、ノアの洪水の情景ではないかと考える史家が多い。左右パネルは長方形の板絵で、左には『悪の世界』が、右には『大洪水後の世界』が描かれており、左の裏面扉絵には、二つの円形画で、『家の中の悪魔』と『戸外の悪魔』とが、右には同じように、『亡びる者』と『救われる者』が描かれている。



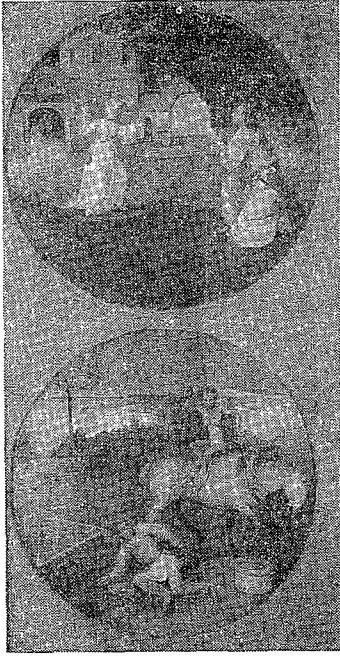
ボッス『大洪水後の世界』



ボッス『亡びる者』と『救われる者』

残念ながら、保存状態はきわめて悪く、しかも、もともと単調な色彩であったため、いっそう不鮮明な状態である。しかし、描かれている絵の内容は、その発想の鮮烈さと、筆勢の力強さ、寓意の鋭さと、豊かなイマジネーションから考えて、ボッス中期の、円熟した傑作の一つと認めざるをえないのである。

左パネル『悪の世界』には、色彩の鮮やかさこそないものの、まことにユニークな発想に基づく、さまざまな妖怪や悪魔たちが、奔放に描かれている。特に、ウォルター・ギブソンやディルク・バックスが、叛逆天使たちの墜落と解した、空中を浮遊する巨大な妖怪のイメージは印象的である。右パネル『大洪水後の世界』でもまた、その第一印象として、強烈な感動が刻印される。一五〇〇年終末説に揺れ動いた時代とはいえ、ボッスは、それをテーマとしてとりあ



ボッス『家の中の悪魔』と『戸外の悪魔』



ボッス『悪の世界』

げることによって、宇宙の広大さ、神の摂理の厳しさの中で揺れ動く、人間世界の愚かさと同しさを、象徴的な一幅の絵として、奔放闊達に描いているのである。画家本来の魅力ある色彩美が、いまし残されていたならばと惜まれる作品である。

左右両扉絵の、四つの円形画もまた、この画家らしい魅力をたたえている。こうした円形画は、ブラド美術館の机絵『七つの大罪』や、ベルリン国立美術館の『パトモス島の聖ヨハネ』などにも見られるが、四点いずれも、円熟期のボッスらしい力強い筆力と、豊かなイマジネーションに発する、鋭い寓意のこめられた名作である。製作年代は、『カナの結婚』よりは数年後、『聖クリストフォロス』よりは数年前、一五〇〇年前後と推定されている。



伝ボッス『ピラトの前のキリスト』

模作作品の或るものがそうであるような、全くの論外作というわけでもない。

描かれた、イニスを取囲む人物の表情を見ても、プリンストンのそれと同一人物と思われるものが、何人か見られるが、それぞれ、侮蔑、憎悪、嘲笑の表出において、残念ながら、ガンやプリンストンの作品の、透徹した象徴化の次元には至っていないのである。画家自身が、何らかの形でかかっているであろうことは推測できるが、その程度については、美術史家の意見も一定しない。しかし、いずれにせよこれが、プリンストンの名作の誕生を、或る程度まで予告していることは確かである。

ボイマンズ美術館には、あと二点、ボッスの名の冠せられた作品が存在する。いずれも十数センチの小さな絵で、

『ピラトの前のキリスト』も、ボッスおなじみの主題である。この作品のオリジナルは、いうまでもなく、現在プリンストン大学美術館に蔵されている画家最晩年の作品であるが、それは、すでに私たちも鑑賞した、ガン美術館の『十字架を担うキリスト』と並んで、「神の狂気」の画家としてのボッス芸術の、最晩年の世界を反映させている名品である。

しかし、ボイマンズ美術館のこの作品は、プリンストンの名作に比べると、大きさはその半分にも達しない小さなもので、絵画全体の迫力や品格においても、とても同一水準で論ぜられるべくもない作品ではあるが、さればとって、彼の



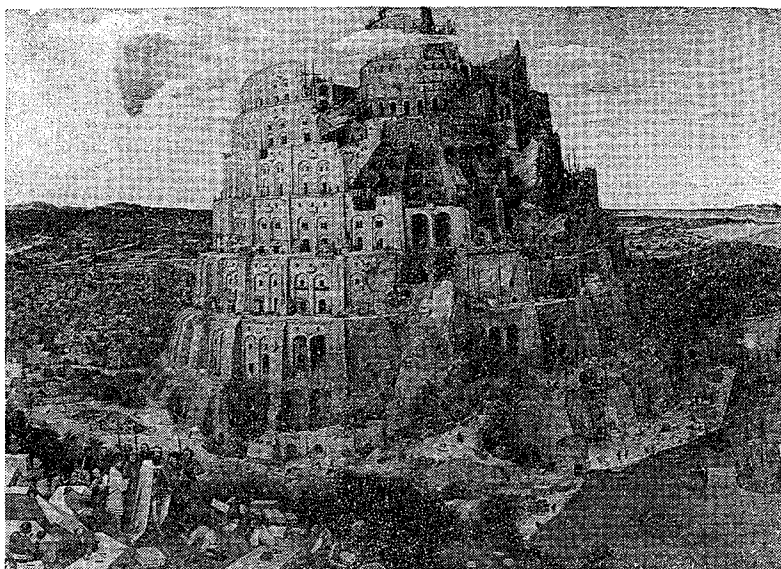
伝ボッス『女性の頭部』



伝ボッス『二人の司祭』

ボッスにかかわる作品としては、おそらく最小のものと思われる。『女性の頭部』と『二人の司祭』がそれであるが、描かれた人物の発散する内的迫力においては、圧倒的に前者がすばらしい。真蹟に関しては、諸説まちまちであるが、『女性の頭部』を描いた画家の、尋常でない技術から考えて、ボッスの筆である公算はかなり高いと思われる。また、『二人の司祭』についても、この人物が、『カナの結婚』の中の、イエスの両隣のユダヤの司祭に、どこことなく似ていることから、『カナの結婚』とほぼ同じ頃、ボッスとの何らかのかかわりにおいて描かれた作品と見る史家もいる。

さて、真蹟とりまげて十点に及ぶボッスの作品を、一室の中で心ゆくばかり鑑賞することができたのは、プラド美術館以来の貴重な経験であり、今回のボッス行脚を締めくくるにふさわしい一日となっ

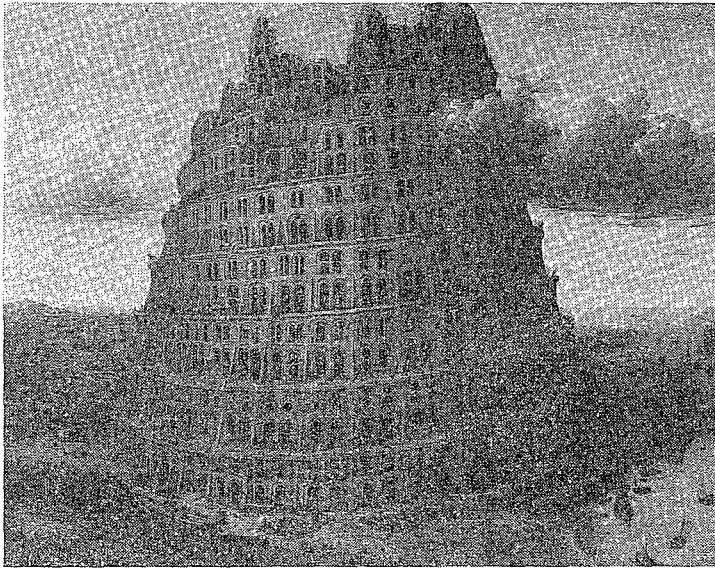


ブリューゲル『バベルの塔』（ウィーン美術史博物館）

た。なおこの同じ部屋では、三点のパティニールをはじめ、ブリューゲル、ファン・アイク、メームリンク、ボウツ、ダヴィッド、マサイスなど、北方ルネッサンスの珠玉のような名品たちが、私たちに時間の経過を忘れさせてくれたのである。

これらの作品に関しては、今はただ一点、ブリューゲルについて触れておきたいと思う。私たちはすでに、マドリッド、ウィーン、ブリュッセルにおいて、彼の名作の数々を心ゆくばかり鑑賞し、彼こそが、ポッサ芸術の衣鉢を、最も正統に継承する者であることを、つぶさに検討したのであるが、この美術館にも、そのことを如実に示す名作『バベルの塔』が収蔵されている。もちろんわれわれは、『バベルの塔』といえば、すぐあのウィーンの大作を思い起す。ボイマンズのこれに比べると、大きさは約二倍の力作である。しかし、描かれたのは、こちらの方が少し後とされている。

ウィーン作品では、中央に描かれた塔の左手前に、



ブリューゲル『バベルの塔』（ボイマンス美術館）

人間の愚行を督励する、権力者ニムロデ王の一行の姿が描かれているが、ロッテルダムの作品ではそれが省かれて、もっぱら未完の壮大な塔だけが描かれている。しかし、絵としての緊迫感は、こちらの方がはるかに高められており、深い寓意もいっそう強く感ぜられる。見る者の意識が、すべて塔に注がれるからであろう。この絵を一瞥して、最も強烈な印象を刻印されるのは、塔の上部にまつわりつく不気味な暗雲である。絵全体の調子も、ウィーンのものよりほの暗く、この暗雲を伴った、未完の塔の上層部の描写に、この絵の深い寓意のすべてが凝縮しているような気がする。大ブリューゲルの全作中에서도、「神の狂気」の靈感の触発が生み出した、至高の名作の一つに数えられるものであろう。

このようにして、ほぼ一ヶ月にわたる今回のヨーロッパのボッサ行脚を終えたのであるが、かえすがえすも痛恨の極みは、リスボン訪問がかなわなかったことである。ここ当分は、『聖アントニウスの誘惑』のイメージ

が、寝ても覚めても私の意識に去来し続けることであろう。

可能なかぎり近い将来に、リスボンのこの名作と、ベルリンの『パトモス島の聖ヨハネ』にお目見えした後、今回は、日程の都合で割愛せざるをえなかった、ロンドンの『荊冠のキリスト』に再会し、さらに、アメリカに存在する五点のボックス、フィラデルフィア美術館の『三博士礼拝』と『この人を見よ』、ワシントン・ナショナル・ギャラリーの『貪欲者の死』、エール大学美術館の『快樂の寓意』、プリンストン大学美術館の『ピラトの前のキリスト』にお目にかかり、積年の宿願を達成したいと考えているのである。